

# 10代の母という 生き方 ⑩

大川 聡子

## ★まえがき

マガジン 17～19号で、若年母親へのインタビューを基に、若年母親が持つ社会的経験の特徴と、ピアグループなどの友人を含めたインフォーマルサポートの機能について分析しています。対象者の概要・研究の背景につきましては、マガジン 17号をご参照ください。本号では、インタビューデータを基にした考察について記述します。

本調査における若年母親達は〈友達とつるむ方が楽しい〉ことや〈レベルの低いクラスメイトと合わない〉こと、さらに〈妊娠したことによる退学〉をしているため、教育到達度が低い人が多くみられました。また原家族の経済状態が不安定であるため、〈アルバイトで家計を助け〉たり、〈学費は自分で賄う〉など、10代にして【金銭的自立を迫られる】状況にある母親達もいました。【学校からの離脱】は、本人が学校に通う意義を見出せなかったことだけでなく、原家族の就業状態の不安定さから、子どもの教育に重きを置かない、あるいは置くことができない環境にあるといった2つの要因により起こっていると考えられます。

若年出産することの問題点として、「母親としての自覚に欠けている」ことを指摘する論文は多数見られます(片桐,2001 前川, 2001)。しかし実際は、若年母親は【妥協できない母親役割】を感じ、《家族に頼れない子育てのプレッシャー》や《原家族における母親役割を踏襲する》ことにより、母親としてあるべき姿を目指して、日々の育児を行っていました。

【若年母親になることによって起きる摩擦】では、周囲の人々だけでなく、夫や義父母との摩擦についても語られました。〈子どもと関わろうとしない夫〉、〈友人と一緒に遊びたい夫〉では、父親役割を受け入れられず、子どもがいなかった頃の生活形態を維持しようとする夫の思惑が読み取れます。夫は原家族の母親役割を理想とし、性別役割分業意識も強く、家事や育児を分担する父親は多くありませんでした。こうした夫に対し、若年

母親達は《夫との摩擦を解消するための戦略》である、〈夫の立場を押し量る〉ことや、〈手伝ってくれたことを褒める〉ことで、家事や育児を少しでも分担できるよう調整していました。《義父母との摩擦》では、出産に必ずしも同意していなかった義父母と、出産後も関係構築がとりにくい様子がかえりました。それでも〈夫に気付かれないように関係を調整する〉ことを通して、母親自身は関係がうまく取れなくとも、それが夫や子ども達に波及することがないように配慮していました。小川(2009)は、産後1~4ヵ月の17~18歳の若年母親のインタビューから、パートナーや義母との食い違いに「鬱積した感情を発散する」方略パターンをとっているとしています。今回のインタビューでは若年母親が夫や義父母との関係を調整しようとする努力をしていることがわかりました。このことから、子どもの成長や母親としての経験を積み重ねることで、母親の他者への関係構築の方法が変化していることが読み取れます。また、年長の母親に対しては〈合わせなければならない〉と感じていますが、〈保育所の役員を買って出る〉ことで、他の母親に承認され、いわゆる「若年母親」ではなく、一人の母親として他者との関係構築をしていることが示されました。このように、10代で出産することにより若年母親は様々な葛藤を抱えますが、関係を調整したり、理解してもらうための努力をすることで、母親として家族や地域社会の人々と関係を再構築する事に成功していました。周囲の反応も〈根拠なく子どもを虐待していると思われる〉から「若いのに頑張ってるねんな」という評価に変わっていました。

出産前の社会的不利な要因を少しでも緩和するために、若年母親は《社会性を身につけ》、《生活基盤を整え》ていました。〈保証がないための生活設計〉にあるように、夫の雇用が不安定なため、将来を見越してより出費を少なく抑えるための生活設計を構築している母親もいました。一般的なライフサイクルでは、社会性を身につけ、生活基盤を整えてから結婚・出産となりますが、若年母親はこうしたライフサイクルと順序が異なります。しかし母親となったことで、子どもの成長という時間軸に合わせて、母親自身も成長している様子がかえりました。田間(2001)は、母性を内面化することにより、統制を主体的に受け入れやすいと述べていますが、青年期である若年母親となった彼女達は、他者から承認されることにより母親としての自己を形成していく過程にありました。そのため、他者から母親とみなされるように責任を持って行動することで、社会化が促進されていました。母親達は、母性という統制を受けて行動を変化させたのではなく、母親として生きていくために必要な社会化を試み、成功していると考えられます。もし彼女達が母親となることを選択しなければ、生活も交友関係もこれまで通りのものだったでしょうし、自らの生活基盤を整える必要も、他者との関係調整に苦心する必要もなかったでしょう。しかし、彼女達は自らに母親役割を課すことで、これまでの生活を大きく変更することができていました。彼女達は母性という統制を、能動的に自身の社会化のために利用していると考えられました。

本調査は若年母親のピアグループ参加者を対象に実施したことから、若年母親にとってのピアグループの役割についての内容も抽出されました。若年母親は出産し母親となるこ

とで社会性を重んじた行動をとるようになり、家族を第一に考えていました。〈社会性のない友人との決別〉では、旧友達の常識のなさ、「すぐ怒ってキレたりする」といった社会性のなさを目の当たりにし、自分のこれまでの行動を省みて反省的に自己点検するようになります。そして〈家族のペースを崩さず付き合える人〉といった、生活リズムや異性関係で家族の生活を乱さない人、母親として付き合う友人にふさわしい人に交友関係を絞り、友人を取捨選択していました。このような友人関係の再構築を経て、若年母親が付き合うことが多かったのが、年齢の近い母親友達でした。

若年母親達はピアグループに参加することで〈友人の輪を広げる〉ことや、〈自分らしい母親像を構築する〉ことができていました。インタビュー場面でも、より年長の子どもの持つ母親が積極的に発言し、年少の子どもの持つ母親に教える場面が見られました。こうした同世代の母親同士の関わりを通して、母親としての生き方を教わり、〈自分らしい母親像を構築する〉ことができていました。母親達は、社会的不利を抱えつつも悩みを相談し、緊急時にはお互いに助け合ったり、自分の家で余った衣料品をメンバーで分け合ったりなど、互いに結び付き支え合っていました。〈家族に頼れない子育てのプレッシャー〉を抱え、〈親でなく友達に相談する〉といったように、若年母親には、原家族が支えきれないプレッシャーやしんどさを持って子育てをしている人も多くいます。そうした家族に回収しきれない育児を支えるのが、同世代の友人達でした。

グループ「B」は若年母親がお互いに助け合い、地域社会に溶け込むための社会性を促す場としての役割を果たしています。若年出産する母親は全出産数の1.26%とごく少数であり、母親同士が集まった際に同年代の友人を作ることは非常に困難な状況です。そのため保育所等地域社会においては、自らの居場所を得るのに努力を必要としますが、グループ「B」はありのままの10代の姿を見られる/見せられる場となっていました。Coletta (1983)は、若年出産した母親に対し調査を行った結果、地域の社会支援を受けている人は、抑うつ症状が低い人が多かったといえます。こうした支援とつながることで、不安を解消していくことも可能となるでしょう。

このグループは現在こそ毎月10人前後の人数が集まり、若年母親同士やボランティアなど地域の住民との交流の場となっていますが、初めからグループ活動が軌道に乗ったわけではありません。援助者自身どう支援してよいか分からなかった時に、グループで支援することを考えたことが、成功に繋がっていると考えられます。グループにおける支援者の関わりとして、野口(2005)は、専門家はクライアントの生きる世界について「無知」であり、クライアントこそが専門家である。その世界をクライアントに教えてもらうという姿勢が、「無知の姿勢」であると述べています。グループにおいても、専門家が一方的に指導するのではなく、親同士の仲間作りを進めていったことで、彼女らが安心できる場を作り出すことができていました。こうした育児支援や同年代の友人との交流は、現在一部の病院や地域で限定的に行なわれているのみですが、同年代の母親同士が交流できる場や10代という世代の特性を生かした育児支援は、どの地域においても必要でしょう。

こうした【母親役割を重視した友人との関わり】や、【将来を見越した生活設計】といった若年母親自身の努力を通して、【子育てを通じた自己評価の向上】が可能になっていました。Smithbattle(1998)も、責任感のある親になろうとする母親の努力がアイデンティティの意識を変容させ、未来への可能性を意識付けること、さらに、母親となることが無力感、葛藤、及び挫折感の悪化を避けることができるとしています。若年母親はこれまでの家庭生活や学校生活で培えなかった自己肯定感を、母親となることで持つことができていると考えられました。

しかし、母親にならなければ自己肯定感が得られない、自信が持てないという若年母親の社会的に不利な要因は、個人の努力で緩和できるものではなく、このような環境を作り上げた社会に投げ返される問題であると考えます。若年出産した母親は出産後も教育到達度の低さや、夫の雇用の不安定さなど社会的に不利な状況の中で育児をしていくことになります。こうした状況は、母親がどんなに生活基盤を整えるための努力をしても容易に改善できるものではありません。

若年で結婚した夫婦の離婚率は高く、離婚により、若年母親が抱える社会的に不利な状況に、父親の不在による育児の負担及び経済的困難が付加します。現状では母子世帯となった際、要件を満たせば生活保護を受けることができ、生活保護を受ける母子世帯には若年出産した母親が多い(道中,2009)とされています。しかし、生活保護受給には扶養義務調査を受けたり資産を売却する必要があるなどの要件があり(杉本ら,2006)、受給者に対するスティグマも科せられる(菊池, 2003)こととなります。何より、彼女達のニーズは生活保護で事足りるものではありません。《家族に頼れない子育てのプレッシャー》で示したように、甘えることのできない家族の下で育ち、夫と新しい家庭を築きたいと考え出産した若年母親が、夫とも関係を築くことができなかつた時の孤独感は、どれほどのものでしょうか。彼女達が、母親として生きるために自分自身を変容させ、社会と関係を築くための努力をしているのであれば、社会の側も母親とつながる努力をする必要があり、こうしたつながりを構築するための「場」を設定することが必要であると考えます。

本研究の限界は、グループ「B」という「場」を持った母親達に調査対象が限定されていることです。グループ「B」は産婦人科の窓口にポスターを貼ったり、保健師の家庭訪問において周知し、参加を促しています。そのため、グループ「B」に参加する人々は、若年母親の中でも、友人を作りたいといった積極的な人が多いです。このため、インタビューを行った母親達は、友人ができず地域で孤立しているといった状況ではなく、地域で同世代の友人を作ることができ、社会サービスの知識もあり活用することができていました。しかし、こうしたグループに参加することが難しく、友人を作ることができずに孤立する母親もいると考えられます。本調査では明らかになりませんでした。こうした立場にある若年母親にも視野を広げていく必要があります。

## おわりに

本章では、若年母親の語りから出産後の社会的不利な状況に若年母親自身がどのように対峙しているかを示しました。若年母親はグループ「B」において交友関係を広げ、周囲の人々との関係性を再構築することができています。こうした「場」を求める若年母親を、地域住民はどのように認識し、どのような関わりをしているか、次号以降で記述します。

## ★引用文献

Colletta N, C., 1983, At Risk for Depression: A Study of Young Mothers, *The Journal of Genetic Psychology*, 142, pp301-310.

片桐清一, 2001, 若年妊娠の社会的背景とその支援, *周産期医学*, 31(6), pp745-748.

菊池英明, 2003, 生活保護における「母子世帯」施策の変遷—戦後補償と必要即応原則, *社会福祉学*, pp23-32.

前川喜平, 2001, 養育機能不全(親準備性の不足)と子育て支援, *周産期医学*, 31(6), pp817-825.

道中隆, 2009, 生活保護と日本型ワーキングプア 貧困の固定化と世代間継承, ミネルヴァ書房.

野口裕二, 2005, ナラティブの臨床社会学, 勁草書房.

小川久喜子, 2009, 若年妊婦のストレスフルライフイベントにおける対処法略パターンとその変化, *日本保健科学学会誌*, 12(2), pp77-90.

Smithbattle L., 1998, adolescent mothers four years later: narratives of the self and visions of the future, *Advance in Nursing Science*, 20(3), pp36-49.

杉本正, 道中隆, 2006, 生活保護制度の基礎知識, 小林出版.

田間泰子, 2001, 母性愛という制度, 勁草書房.